

2022年11月16日(水)

老球の細道701号

荒野の五人

会津バスケットボール協会 室井 富仁

映画『荒野の七人』は1960年代のアメリカの西部劇映画である。監督はジョン・スタージェス、出演はユル・ブリunnerやステイブ・マックイーンなどハリウッドの大物俳優達である。あの黒澤明監督の日本映画屈指の名作『七人の侍』(1954年)のリメイク映画であるが、私の世代の人たちは皆一度は見たことのある映画ではなかろうか。

両方の映画共に、それぞれが特技と個性を持ち、時にはぶつかり合いながらも力を合わせて共通の敵に向かって戦う。まさにチームワーク理想の姿を彷彿させるものだった。

七人ではないが、今回バスケットボールではU-18、U-14の県大会において5人で素晴らしい試合を見せてくれたチームがあった。いずれも相双地区で、U-18は相馬高校男子(ベスト8)、U-14は鹿島中学女子(準優勝)。

5人しかいないハンディキャップなど全然感じさせずに、1人1人が素晴らしい能力を持っていた。交代要員は誰もいないためにファールトラブルを危惧されたが、そんなことなど一切気にせず、全員が普通に走り、激しくデイフェンスをしていた。相馬高校は優勝した福島南に負けたが、気後れしないで見劣りのしないプレーをしていた。しかも1、2年生のみである。次の新人戦が多いに楽しみなチームであった。鹿島中学校は全員サイズがあり、1:1の攻撃力に優れていた。力強さがこれから兼ね備えられれば、これまた次の中体連が楽しみなチームになるだろう。いずれも敵は我にあり、ファールとケガである。

会津のみならず、県内全体でメンバーの少ないチームが増えているが、たった5人しかいないチームでも県大会上位に進出しているチームが現にある。あきらめてはいけない。私もかつてメンバーが少なくて困った時代が何度もあった。特に会津高校講師時代のコーチ時代(1977)は有望なチームに育ったなあと満足したら次から次へと部員が退部して最後には一人しかいなくなってしまう。アガサ・クリスティー原作から「そして、誰もいなくなった!」、はたまたシェークスピア作『ジュリアス・シーザー』の「〇〇!おまえもか!」と自虐台詞を言いながら耐えたものである。

バスケットに限らず色々な競技の名将たちの自伝を読むと、多くが部員の少ない時代を経験している。その時に皆一様に苦労しながらも、あきらめないで活動を続ける、部員を増やす、減らさない、そして勝つ創意工夫をしている。試練がコーチ、チームを鍛えてくれる。

メンバーが少ないことにもメリットがある。鹿島のコーチが言っていた。「メンバーチェンジを考える必要がない」。強豪チームでは試合に出場できない選手が多い中、フルにゲーム出場できる。これほど選手にとって幸せなことはないだろう。少ないことにも福はある。《閑話休題》中学校はマンツーマンデイフェンスの縛りがある。ファールトラブルやケガで4人以下になった時のデイフェンスはどうなるのだろうか。ゾーンでも良いのか、1人少ないマンツーマンで守るのか。今のところルールはないらしい。